

36 膝関節に名前を残す二人のフランス人——Gerdy 及び Segond

小林 晶

一般にはジェルディとスゴンの名前は、それ程知られていない。しかし、整形外科医あるいは膝関節に関心を持つ医師ならば、必ず一度は聞く名前である。彼らの不滅の業績は冠名用語として残り、今日脚光を浴び使用されている。この二人のフランス人外科医の生涯、業績の詳細を報告する。

Pierre Nicolas Gerdy (1797—1856) はフランスのオーブ県ロシュの貧しい農家に生まれた。学資が無いため数年遅れて中等教育を終え、縁あってパリの St. Louis 病院の雑役助手となった。その後も不運が付きまとい、天然痘や膝関節炎に罹患し、貧困のどん底に喘いだ。数年遅れて、やっとパリ大学に入学し三十一歳の時、Pithe 病院の Lisfranc 教授の助手として採用された。

彼は幼少時より絵を描くことが好きで、この助手時代に美術学校の解剖学の講義を受け持ち、後にその教授に推薦された程である。一八二九年に後生に名前を残すことになった、有名な本を出版する。『人体体表解剖学』である。この本には「画家、彫刻家、外科医のために」という副題が付いていて、最初に画家とあるところに彼の意図が窺える。

この二百六十頁目に彼の名前を冠することになった、脛骨近位外側に見られる骨の結節の記載がある。それまで記載が無かったこの結節には、腸脛靭帯が付着し、機能的に極めて大切な位置にあり、古典的な絵画、彫刻にもこれが描かれていることを例を挙げながら説明している。これはジェルディ結節と呼ばれることになり、近代整形外科学の中では世界中で使用されている。因に PNA には記載は無く、かつての INA には *tuberositas tractus iliotibialis* とある。

生来の病弱が幸いせず、病理学第二教授となったが、失意のうちに五十八歳で世を去った。運動性言語中枢に名前を留める P. Broca は彼の弟子であったが、外科学会

の追悼演説で、当時の外科の大家に対して正しいことを敢然と言い抜く気骨が、栄進の機会を逃したと言っている。ジェルディはクロード・ベルナルと討論をよくし、後者の医学に於ける絶対的決定論の主張を必ずしも支持しなかった。

もう一人の Paul Segond (1851—1912) は、スゴン骨折として名を残している。家はプロヴァンスの出身で、パリで生まれている。前者とは異なり、順調に医師となり、一八九五年にパリの Salpêtrière 病院勤務となった。一九〇五年には外科学教授に栄進し、十一年には学会会長を勤めている。

問題の骨折は一八七九年、『Le Progrès Medical』誌に、「捻挫による膝血腫の臨床的、実験的研究」と題し、五編に分けて発表された中にある。当時のことで、客観的力の計測装置も X 線もなく、助手に大腿部を把持させて、関節の屈曲度を変えながら下腿の回旋を強制的に行い、その結果を詳細に報告した。軽度屈曲位で下腿を内旋したときや、内反位で直角以上屈曲し内外旋を強制した場合に、それまでに記載の無い特異な骨折が、脛骨近

位外側関節縁に発生することを見出した。この小さな骨折は関節と交通し、深さは五—一〇ミリで、前脛骨筋起始部や近位脛腓関節には達しないと報告した。

近年、特にこの骨折が目ざされているのは、スポーツ損傷に多発する膝前十字靭帯損傷に合併することが多いからである。現今、この損傷は世界的なレベルで治療法の研究が続けられていて、膝関節外傷に関する研究の過半数を占めている。スゴンが亡くなったとき、フランス外科学会、産婦人科学会、泌尿器科学会はこぞって、追悼記事を掲載した。

現代、脚光を浴びているこの二人の業績を顧みるとき、Ackerknecht が『hospital medicines』と名付けたフランス医学の真髄を垣間見る思いがする。すなわち、昔のベッド・サイドだけの医学ではなく、検査主流の現代医学でもなく、病院に医学と医療が共存している姿である。

(福岡整形外科病院)